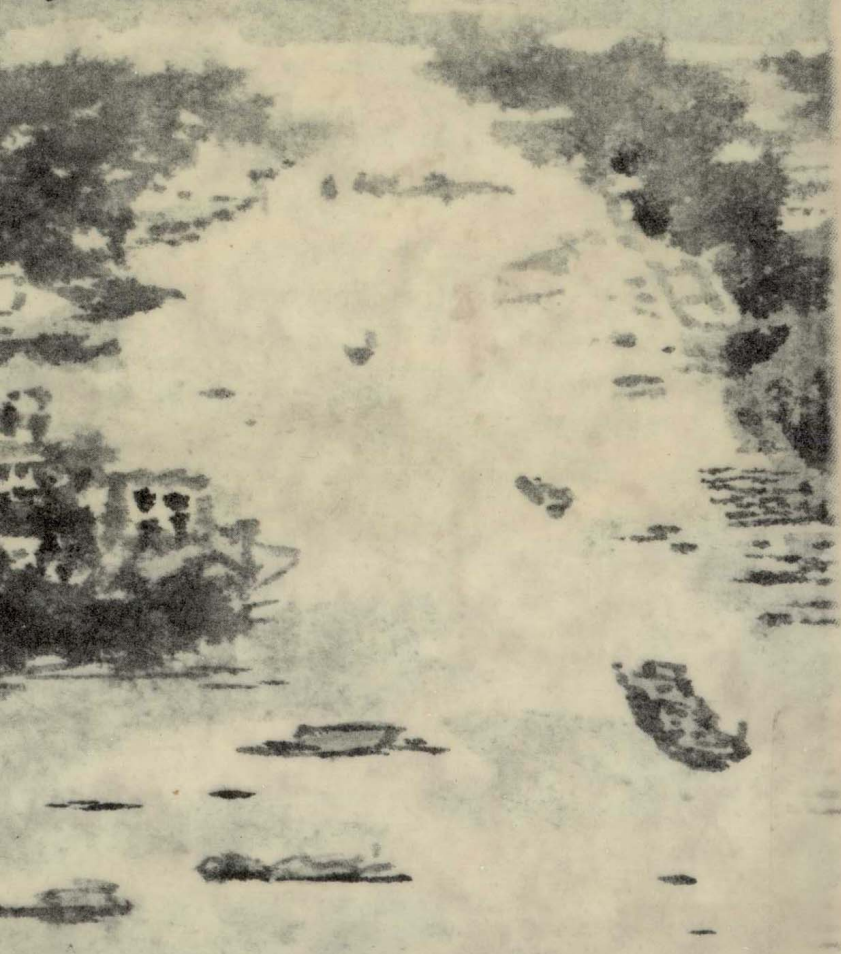


風の来る道

わが旅Ⅲ

水上 勉



風の来る道

わが旅Ⅲ

水上 勉

風の来る道——わが旅Ⅲ

昭和六十二年六月三十日 初版第一刷

著者 水上 勉

発行者 増田 義和

発行所 株式会社 実業之日本社

東京都中央区銀座一—三—九
電話（編集）五六二—二〇五一
（営業）五三五—四四四一

印刷所 東京 研文社

製本所 共 文 堂

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©TSUTOMU MINAKAMI 1987

Printed in Japan

ISBN 4-408-53084-0

風の来る道——わが旅Ⅲ／目次

岡山曹源寺にて	7
風の来る道（一）	17
風の来る道（二）	26
風の来る道（三）	35
再訪高野分教場	45
田中神社付近	54
若狭の秋	63
秋ふけてゆく若狭	72
滴水の里	82
広州にて（一）	91

広州にて(二)

100

昆明にて(一)

109

昆明にて(二)

119

一様院落成

130

伯耆・関金温泉にて

139

鉦ならし信濃の国を……(一)

148

鉦ならし信濃の国を……(二)

159

鉦ならし信濃の国を……(三)

170

湖北塩津にて

180

大菩薩禅堂訪問記

189

あとがき

198

カペー絵
さしえ
水上勉
装幀
安彦勝博

風の来る道
— わが旅Ⅲ

岡山曹源寺にて

岡山で講演せねばならぬ機会があつてついでに円山まるやまの曹源寺に詣でた。ここは、一滴文庫の設立趣旨ともかわるわが村の出身で幕末から明治にかけて活躍された儀山善来和尚が師家をつとめられた寺である。現住職の横田一保老師が先日、若狭へこられて、大島の儀山和尚の生誕地を訪問された際に、立寄られたこともあつて、そのお礼も申しのべたかった。

儀山和尚は十七歳で若狭を出て、文化九年、二十二歳の時この岡山にきて、当時の師家太元孜しげん元師に入参された。それから、七十七歳の明治十一年まで曹源寺におられて、太元和尚の跡をついで、いくたの雲水を育てられた。由利滴水、今北洪川、釈越溪、釈宗演、多士済済の面々が曹源寺僧堂に集まって、儀山和尚の提唱をきき、修行にはげんだ、明治の禅界の息吹きが感じられる寺である。

曹源一滴水で名高い儀山和尚の、一滴の水を惜しまれた一喝が、由利滴水を生み、いつてみれば、仏教の受難時代といえた明治初期に、曹源寺だけがさかえたのであるが、これも岡山藩主池田侯の帰依があつてのことだろう。池田藩代々の菩提寺だつたことにもよるけれど、藩学者に熊沢蕃山がいて、七十ヶ寺もの他宗派を廃寺とした蕃山は、廃仏の先鋒で名を馳せているが、さすがの彼も、太元孜元だけは黙視できぬところがあつて、孜元和尚の鉄槌をうけて育つた儀山が、これをうけついで、純粹禪道場の峻厳を守りぬいたことになる。

わが若狭の孤村の貧しい漁家に生れた儀山が、どうして岡山に向つたのか、くわしいことをつたえる文書はないのだが、六歳上の大拙承演がやはり、若狭を出て岡山に入つていたから、そのあとをしたつてきたというのが儀山曹源寺入りの理由で、余のことは、今日もわかつていない。

儀山が修業した頃の曹源寺は、いまの堂宇伽藍ではなく、もっと雄大で、七堂がすべてととのい、山門からまっすぐのびた参道のわきには広い水田が川岸までつづいていたそうだ。池田侯が、寺の持ち田として寄進したもので、太元和尚は、この田を守りして、雲水の食糧とした。儀山もこれをうけついで、雲水とともに農事にいそしみ、日常作務のなかで、禪の極意を雲水に教示したのである。風呂の水が熱すぎて水をうめにきた由利滴水が、桶の残り水を無造作に捨てたのを見て、和尚が叱りつけた一語が、今日も茶人のよろこぶ掛軸の五字に残された。

「曹源一滴水」とは、何のことはない、わが若狭の辺境に育った子が、旱魃に泣いた父母の涙の夏を思いだして、水を惜しめと諭したにすぎない。学智のことばではなく、生活から出たことばだった。曹源寺は、この思想を抱いたから、廃仏時代に生きのこれたともいえよう。若狭とつよくむすびつく所以である。

その浴室は、昔のままのが残っていた。山門、法堂を右に見て、杉林のなかの石畳を歩いて、寺房の庫裡にいたる。そのよこに、丸瓦をのせた大きな浴室は、今日も、アメリカからきた雲水たちが愛用する。いくらかかたむきかけた柱。しみのついた木目もあり軒樞。厚い瓦。重い扉。眺めていると、由利滴水がひれ伏した地べたがうかんで、頭が下がってくる。この浴室があって、儀山の思想は明治に花ひらいたか——と。

建物というものは、不可思議なもので、古い虫喰い柱の浴室にも、心をしのばせれば、古い暦がうきあがってくる。

由利滴水は、儀山に叱られた翌日に滴水と名をあらためたが、この人も若狭に近い丹波の何鹿郡白道路村の出身であった。上田姓で、父は彦兵衛、母は絹。文政五年生れ。四歳の時に父に死に別れ、加佐郡河守の由利清左衛門家に引取られた。九歳で出家、行永村の龍勝寺で得度。十九歳で岡山曹源寺に入って儀山善來の膝下で鍛えられた。四十一歳で京都天龍寺の西堂に進み、師家となった。文久二年のことだが、蛤御門の変が起きた元治元年には滴水は天龍寺

にいた。天龍寺は当時長州軍のアジトで、桂小五郎ら志士が宿泊し事變の時は三百人の水戸兵もいた。塔頭寺院はみな宿舍となつて、變にそなえた。ところが、いよいよ事變が起き、長州軍が負けると志士たちは、潰走した。もぬけの空となった天龍寺を攻めたのは、薩藩軍勢である。記録によると、大砲までもった二百余人がとりかこんでいまにも天龍寺を焼き討とうとした。滴水は臨川寺にいたので、本山へかけつけて、隊長の村田新八と面談した。

「寺を焼いても長州軍兵は一人もおりませぬぞ。大砲までおもちだが、それでも寺が憎ければ、先にわしを殺してから、寺を焼きなさい」

村田新八以下薩軍幹部は和尚の胆力にびっくりした。

「わかりました。焼きはしませぬ。だが、折角やってきたのだから、空砲くらいは撃つて帰らぬと報告のしようもありませぬ」

滴水は空撃ちならいいだろうと安心して寺へ入った。と、すぐ大砲が撃たれた。空砲ではなかった。法堂で火を噴いた。村田の裏切であつた。滴水は烈火の如く怒った。村田はいった。

「この寺は国賊を匿っていたのです。その陣營を焼き払うのが朝命をうけたわれらの任務です」
「先には勤皇のためと寺を借りられ、今日は朝命だとして寺を焼かれる。何と、都合のよい言い分じやのう」

滴水はからからとわらつた。村田新八は、意氣揚揚とひきあげたが、明治十年西南事變の際



に、流弾に倒れた。それをきいた滴水は、

「わしをあざむいた男が死んだ。因果の理はあざむくことは出来ぬ」

と弟子たちに行った。天龍寺につたわる由利滴水伝のあらましである。滴水は、焼失した天龍寺を復興し、五年に大教正となり、禪宗三派の初代管長となった。曹源寺で養われた儀山善来の魂が息吹いたのである。大勢の弟子がいた。高木龍淵、橋本獨山、山岡鉄舟の流れがそれである。明治禪は滴水がいてはなやいだといわれる所以だ。

方丈に招かれて、一保老師からお茶をいただいた。赤毛氈のしかれた座敷から、曹源池の枯淡な庭が一望できる。正面に山がある。中央に岩組みと流水がみえる。小滝から落ちる水が、広い池に満満とたまり、山肌の楓や松の、ふかいみどりをうつしている。回遊式庭園である。池畔には適度な草が生えている。それがなかなかいい。枝ぶりのいい松。楓。岩組みの妙。山に見える逍遙道の柵。身を洗われるような思いで、小雨のけぶる中にいたら、天龍方丈の国宝庭園より規模は小さいけれど、岡山に古刹こしかありの思いがした。滴水も草とりした庭である。儀山が死去の年まで親しんだ庭である。純禪が守られた庭である。ここには観光客など一人もない。

法堂はいま、改修中で、巨大なすだれをかぶって天にそびえている。それをとるかこむ巨松

の枝。さしかわすふかみどりの海。

本堂にゆき、代々住職のお写真を拝見、そのわきにある小部屋を一保老師はあけてくださる。

「ここが、宗演さんの居なさった部屋ですよ」

暗い物置き小屋のような部屋だった。天井がひくくなっていて、いかにも小僧部屋といった感じだった。ああ、ここで、わが若狭の一瀬常次郎が修業したか。

一瀬五右衛門家は高浜町にある。長福寺という相国寺派の寺のよこだ。常次郎は十一歳で京都へゆき、叔父越溪のもとで得度した。そうして、越溪の弟子、虎関老師について修業したが、儀山の晩年に岡山へきて、儀山和尚の弟子となった。宗演は、儀山の臨終にかけつけた唯一の弟子である。三十五歳で、今北洪川のあとをついで円覚寺の管長になった。夏目漱石が、ノイローゼになって参禅したのはこの宗演の隠寮だった。小説「門」には、楞伽窟として出てくる。赤銅いろの顔をした若い師家に、漱石はやりこめられて喪家の犬の如く円覚寺を退散したと「門」で書いている。

その宗演の胆っ玉も、岡山曹源寺で養育された。儀山の一滴の思想が、鎌倉にきて湧き水となったのである。

一保老師は伝衣室、円山要宗老師の嗣法である。要宗老師は、大徳寺の広州宗沢の嗣法でなく満洲におられた。一保師はその大連時代の弟子。終戦と共に師と帰国、師が曹源寺に入ると共に今日まで曹源寺を守ってこられた。

「いつも考えこんでしまうんですが、江戸末期に、若狭の文盲の子らが、ふたりも三人も、どうして、この岡山へきたのでしょうか。その理由がわかりません。老師はどう思われますか」「やはり、太元老師の名がしれわたっていたのではないのでしょうかね」

「ラジオや新聞のない時代ですのにね」

「ラジオや新聞がなくても、きびしい師匠の名はしれわたるものです。そうでないと、滴水和尚なども、どうして丹波からやってこられたか……太元・儀山の名は、当時、日本の禅宗界で、しれわたっていたのだと思います」

「文盲の子らもうごかした師匠たちはえらい人ですなア」

「曹源一滴水の五字は、いまは日本のどこでもきかれる語になりましたな。小さなことでも真理なら、大きくなるんですよ」

一保老師はこの寺が、池田侯の庇護によって、幕末を生きて、いまでも檀家は少ないが、修業を求めるアメリカの雲水で、あふれている経過をはなされた。

「日本には、もう純粹禪はありません。アメリカへ渡ってしまいました。仏教東漸とはよくい